

日本列島の将来像

21世紀への建設

丹下健三著

講談社 新書版 254頁 250円

現代日本の都市形成の方向
をとく。

本書は、現代日本資本主義社会の経済発展の上にとって、その都市建設のあり方をとく。

本書は、第一部日本列島の将来像、第二部現代都市——東京の将来をどうするか、の二部よりなっている。

第一部では、1965年より2000年までの建設投資額は戦後の20倍になることを予測する〈1章〉現代は情報技術の進歩、コミュニケーション技術の革命の時代であるとして、情報をにう人人を第3次の人口と規定し、現代大都市形成の主導力は人口の第3次化にあるとする〈2章〉日本都市人口は2000年には1億1千万人になると予測し、その配置について問題を提起している〈3章〉。首都圏、近畿圏、中京圏といった考え方は、勢力圏的な縄張意識がある、また都市を求心性をもったものとして形成することはこれからの都市建設ではするべきでなく、内部

的にも外部的にも、線型、開放型、発展型の構造に都市建設をするべきである。東海地域に対する過去の投資および現代の投資の傾向、この地域の動きから、東海道メガロポリス〈巨帯都市〉の形成は必然だし、また20世紀後半21世紀の日本の創造活動を維持するために必要であるという〈4章〉。このように第一部では、線型、開放型、発展型の東海道メガロポリスの形成についてのべている。

第二部では、日本および東京の現状分析とその分析の結果から東京を求心的な都市から線型、開放型、発展型の構造にする具体的計画〈東京計画——1960〉を提案している。そして、これら新しい都市形成に必要な、建築施設、建築空間、人間性をまもるための空間秩序についてのべ、日本の伝統的な私性、非公共性、反社会性といったものが都市形成のうえでガンになっているとして及省を求め、最後に建設のプログラムを述べています。

現代日本の都市形成のエネルギーの大きさと、そのエネルギーにいかに関与を与えるか、について書かれた数少ない書のひとつ。〈T〉

あとがき

都市人口の増大、首都圏への人口集中、東京への管理機能の集中にはいちじるしいものがあります。

しかし、首都圏への人口集中にもかかわらず、その中心部東京への人口集中はすでにとまり、東京都の人口は減少をはじめました。一方東京周辺の都市は、人口急増になやまされ、都市整備をなおざりにしたまま、人口集中地区を増加させています。健全な市街地とはいえない市街地の増加のエネルギーと、行政および財政力のアンバランスはますます増大しようとしています。

地方自治を確立しながらこれらの事態に対処する方向をさぐるために、首都圏と東京周辺の都市の問題という面をとりあげ、「首都圏と横浜」を特集しました。

寄稿者の方々には、例年がない暑さの中、御執筆いただき誠にありがとうございました。厚くお礼申し上げます。〈N〉

調査季報

12

1966年8月31日

編集・発行——横浜市総務局調査室

横浜市中区港町1-1

印刷——有限会社 宮村印刷所

横浜市南区永楽町2-22